



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町二の一

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 鉛の箱 (コンテナー)

昭和40年7月15日 初版発行

検印廃止 ￥300

著者 くに 邦 光 史 郎

京都市左京区北白川東伊織町25-1

発行者 神 吉 晴 夫

印刷者 堀 内 文 治 郎

東京都千代田区神田三崎町2

堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽町2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Sirô Kunimitu 1965

なまり はこ
鉛の箱 (コンテナー)

くに みつ し ろう
邦 光 史 郎



カッパ・ノベルス

目次

第一章	反乱	5
第二章	情報屋	27
第三章	霧の城	50
第四章	その背景	75
第五章	ガンマー・ガーデン	109
第六章	回転木馬	131
第七章	森は動いた	155
第八章	人形峠	185
第九章	夜の踊り	217
第十章	ある晴れた日に	245

本文のイラスト
中村^{なかむら}
宏^{ひろし}

「鉛^{コンテナ}の箱[」]「[」]ここでいうコンテナの本来の意味は、[」]船で運ぶ積荷を覆^{おお}う容器[」]（「ウェブスター」による）のことである。

第一章 反乱

1

火曜日の朝のことであつた。

午前十時を回ったところ、丸の内まるの内の一角にある太平ビルたいへいビルの正面玄関に、黒塗りのベンツが滑り寄ってきた。

十月末にしては冷たい風が舗道をわたって行ったが、うやうやしく扉とびらをひきあけて待っている運転手の前におり立った五十年配の紳士の顔色は、あからんでいた。

一目でそれとわかるゴルフ灼やけなのだ。ふさふさとした銀髪の下で、いかにも健康そうな微笑をみせて、紳士は、正面玄関をはいつて行った。

軽く右肩をいからせて、長身やせ型の紳士は、エレベーターに乗り込んだ。

七階、エレベーター前の受付所に控えていた女子社員は、眼の前に現われた紳士をみつけるなり席を立てて挨拶した。

「お早うございます」

「やあ、お早う」

明かるく闊達かつたつな声音であつた。

受付係は、紳士の後ろ姿を見送りつつ、電話機のダイヤルを回した。

「秘書課ですね。こちら受付でございますが、春山はるやま常務がご出勤になりました」

いつもなら、それだけで彼女の役目は終わったのだが、その日は、もう一つ頼まれていたことがあつた。

つづいて、ダイヤルの数字を拾うと、企画室付寺尾てらお宏三こうぞうを呼び出した。

「ただいま、常務がご出社になりました」

「そうか、ありがとう」

いくらか緊張した声のひびきが耳もとに伝わった。

そうだわ、今朝は常務会があるんだわ。

セットしたばかりの髪に手をやりながら、彼女は、磨みがき上げたようにきれいな廊下のかなたを眺めた。

磨りガラスの扉に、中央原子力発電株式会社と、金文字が浮き出ている。

その扉の内部は、どこの会社ともそうたいして変わりのないオフィスになっていた。

技術部の自席でAECレポートを開いていた飯塚敏夫の眼の前で、電話のベルが鳴り出した。

「はい、技術部ですが」

三十歳になって間もない飯塚は、女のように細くかん高い声で応じた。

「僕だ。寺尾だが、いま、春山常務が見えられた。いいね、じゃ」

電話は、そこで切れた。

堅く受話器を握りしめた飯塚の掌が汗ばんでいた。

にわかに落着きを失った眼を、まだ薄暗さをやどしているような窓ガラスに向けた。

しばらくそうしていた。

ふっくらと色白い頬なのだ。どこかに少年のような幼さを残している顔貌であった。

ふくらんだ鼻孔が、かすかにふるえ、唇が乾くのだから、軽く舌先でしめしてから、思い切ったふうに、ポケットからキイ・ホルダーをとり出すと、鍵のかかる引出しをあけた。

一番上に、社名入りの大封筒がのっていた。

それを左手に持つと、彼は、引出しをしめて立ち上がった。

人の出入りの多い総務課とちがって、技術部はひっそりしていた。

隣席の小山が、くわえた煙草に火をつけながら、どこへ行くのだという眼つきで見上げた。

「例の件で、行ってくるよ」

笑いかけようとして飯塚は、頬を硬ばらせていた。

「大丈夫だよ。常務は、われわれの味方だから」

低い声で、小山は励ました。

彼らは、なんとなく課長の席のあたりを眺めた。

石部課長は、うつむいて書類を繰っていた。

「じゃ」

軽く眼で合図しながら、飯塚は部屋を出て行った。

ひどく廊下が長く奥深いものに思えた。

下腹がしこって、冷や汗がにじんできた。

だが、もう引き返すことはできなかった。

多くの期待を背負っているのだと彼は思った。

三つならんでいる役員室のまん中で、彼は深呼吸をし

た。

ノックすると、明かるい声が答えた。

この会社に出向してから二年になるが、自分の意志でこの扉をノックしたのは、これがはじめてのことだった。

扉の内側は、かなり広がった。

手前に応接用のセットが配置されていて、窓ぎわに、大型のデスクが据えつけられている。

常務春山不二男は、パイプをくゆらせながら、スケジュール表に、メモを書き込んでいた。

緊張しきった足取りで近づいてくる飯塚を認めると、

春山は、重々しい口調で問いかけた。

「なんの用だね」

「はい、常務にお願いがあつて参りました」

「僕に……用件があれば、部課長を通じるなり、秘書課を通してくれなくちゃいかんね」

言葉のきびしさに似ず、眼もとはやわらかく、俗にいう温顔なのである。

「申し訳ありません。実は、直接お願いしたいことがあります」

「いかんね、そういうことは、ルール違反だ」

「これを、ごらんいただきたいのです」

堅く握りしめていたとみえて、皺よった封筒をさし出した。

「意見具申かね」

常務は、封筒の中から、書類を抜き取った。数枚の用紙をとじた文書なのである。

C・EならびにE・E型原子炉と重水型原子炉の得失について

表紙にはそう記されていた。

「すでに、二号炉は、軽水型のE・E社製と内定しているようですが、私も一部の技師たちは、研究の結果、はるかに重水炉のほうが適していると……」

「待ちたまえ。そういう意見なら聞くわけにはいかん。

だが、これは、参考までに、預かっておくとしよう」

「は。よろしく願います」

硬直したからだを折り曲げて頭を下げると、赤く熱した顔面ににじみ出た汗が、床にしたたり落ちるようであった。

「これから会議がはじまる。帰りたまえ」

「は」

ほっとした表情で、飯塚は去って行った。

春山常務は、手もとに残った書類を眺めながら、パイプをくゆらせた。

すこし椅子を回すと、窓がみえた。

まだ初冬には間があるというのに、もうすっかり鈍色の空になっていた。

世を背く 野菊や百の名に入らず

ふと桃隣の句が脳裏に浮かんだ。

だが、それが、いったい誰の運命を示しているのかとなると、ためらいがあった。

電話機が鳴って、秘書課から、会議の時間が迫っていることを知らせてきた。

彼は、たった今受け取ったばかりの書類を、机の引出しに納めると、内ポケットに挟し込んであった別の書類を抜き出して、先刻、飯塚が持ってきた封筒に納めた。

浅田社長殿

具申書在中

封筒には角張った文字でそう記入されていた。

軽く、それを左手に携えて、春山は、役員室を出て行

った。

重役会は、役員会議室で行なわれた。

出席者は、浅田源太郎社長、朽木信隆専務、磯辺正之常務、そして春山常務の四人であった。

会議中、あまり発言もしないで、にこやかにパイプをくゆらせていた春山常務は、一応提出された問題が一段落ついたところを見はからって、封筒をとり出した。

「ところで社長、こういうものを企画室に届けてきた社員がいますね」

封筒にはタイプされた文書がはいっていた。

C・E型原子炉とE・E型原子炉の得失について

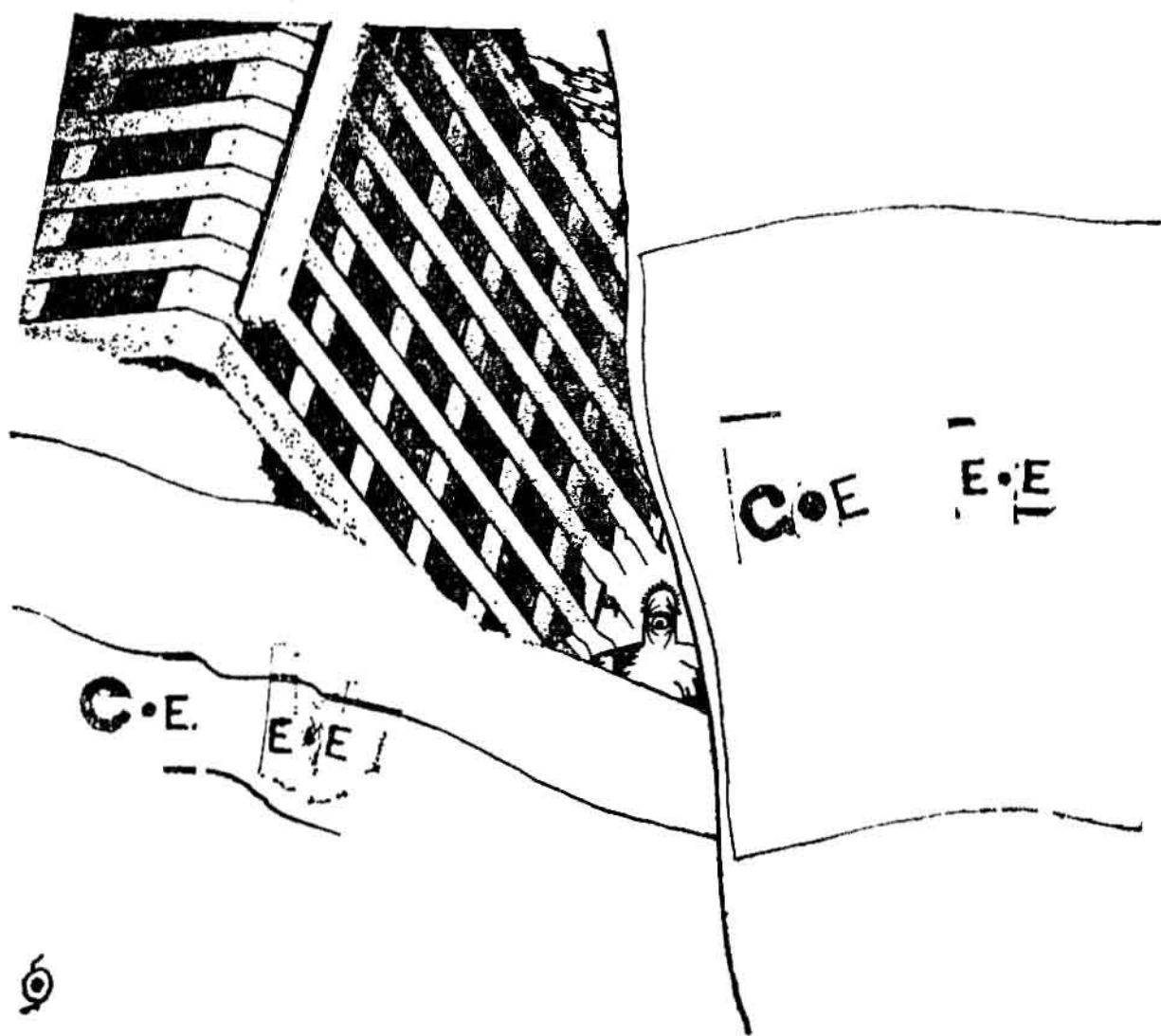
そう標題された文書なのである。

「ふむ、それで、どうだというんだね」

せり出した下腹の上に、ぼってりした両手を置いて、浅田社長は、その細い眼もとに困惑の色をまつわらせた。

「つまり、E・E型よりは、C・E型のほうがわが国の現状に適しておるといふんですよ。僕が眼を通した限りでは、そうなっておりますな」

春山常務は、茫漠と表情をぼかしてそう言った。



「しかし君、いまさらなにを……」

多血質の朽木専務は、こめかみの血管を筋ばらせて、割り込んできた。

「そうだな、いまさらどういったって、はじまるまい」

浅田社長は、ややあいまいに口ごもりつつ応じた。

「はじまりませんよ。賽はすでに投げられたんです」

朽木専務がそう断定的に言い切ったとき、春山は、一呼吸おいてから、ぽつんと呟くように口を開いた。

「ところで朽木さん、この具申書に署名しておる千代川技術部長とその部下の飯塚某というのは、たしか、近電さんから出向してきた人たちでしたな」

みるみるうちに、朽木専務の顔面は真っ赤になった。

怒りと驚きと屈辱感が、一度にこみ上げてきたらしい。

「千代川が、こんなばかげたことをするはずがない」

語尾がふるえていた。

「そうでしょう。千代川君は慎重居士で通ってますからな。おそらく、部下の不平分子が、勝手に部長の名を借用したにちがいありませんまい」

だが、朽木専務の激怒と興奮はすこしも収まりそうに

なかった。

「社長、きょうの会議は、これで終わらせていただきますよ」

憤然として、自室へ引き上げていった。

怒りっぽい男というものは、攻撃的で、何事もすぐ行動に移さないと気がすまないものであるらしい。

朽木専務は、ただちに技術部の千代川部長を、電話口呼び出そうとした。

だが、出てきたのは、石部課長であった。

「はい、部長は、昨日から大阪へ出張になっておりますが」

「大阪へ……。じゃ、飯塚という男はおるかね」

「飯塚でございますか。いま、外出いたしております。ちょっとお待ちくださいませ」

小山君、と呼んでいる声が受話器の向こうから伝わってきた。

もどかしそうに、朽木専務は、床を踏み鳴らしていた。

「お待たせいたしました。飯塚は、風邪かぜだとかで、早退したそうでございます」

逃げたな。わしの顔に泥をはねとばしておきおって。朽木専務は、口惜しさに、眼前が赤黒く燃え上がるような思いに襲われた。

「よし、わかった」

勢いよく受話器を戻して、彼は立ち上がった。

檻おりの中に閉じ込められた動物のように、彼は役員室を歩き回りつつ呟きつづけた。

まんまと飼犬に手を噛まれた。

春山が、二十パーセントの出資をしている関東電力の代表者なら、自分だって、同じくこの中央原子力発電会社社に、二十パーセントの出資をしている近畿電力の代表者ではないか。

こんなことで陥おとしれられてたまるかと、彼は拳こぶしを握りしめた。

窓の向こうに雲が流れ、風が鳴りはためいている朝のことであった。

2

午後も風が強かった。

強いといっても、のべつ幕なしに吹いているというの

ではなく、突風のように激しく天の一角から地上めがけて吹きおろしてくるかと思うと、また嘘うそのように静かになり、これならたいしたことはないなどと油断している、いきなりつむじを曲げて襲いかかってくるのである。

奈美は、セットしたての髪をかばったり、珍しく和服を着込んだので、裾すそのみだれが気になってならなかった。

そのために、つい話しかけてくる夫の言葉を聞きもらしてしまって、なんども訊ね返した。

「えっ？ 誰がくるの」

「手紙だよ。もし会社から何かいってきたら」

夫の飯塚はかなり背が高かった。そのために、いっそう声が届きにくいようだ。

「会社からって、何かあったの」

「別に……こないとは思うんだ」

「で、きたらどうするの」

「気にしなくたっていいんだ。小山君がちゃんとやってくれるはずだから」

なんとなく隠しているような口ぶりであった。

言わなくてはならないことや、言っておきたいことが咽喉のどもとまでこみ上げてきているくせに、それを噛み殺しているように、夫の顔色は冴さえなかった。

「変ね、こんな出張って。朝までなんの予告もなかったくせに、いきなり午後から大阪へ行くなんて、会社もどうかしているわ」

会社で、何かあったのだろうか、奈美は探りを入れた。

けれど、飯塚は、触ふれられることを恐れてでもいるように、眼をそらした。

「そのくせ、切符だけは、ちゃんと手配してあったんでしょ」

「急用ができたんだよ。急がなきゃ。発車まで、あと十分だ」

まだ工事中だったので、八重洲口やえすの通路には板囲いがしてあった。

強く踏むと音のしそうな板敷きの通路を、夫の飯塚は大腿に歩いた。

遅れまいとして、奈美は裾がもつれた。

入場券は、夫が買いに行ってくれた。

ぼんやり佇^{たたず}んで、中央改札口のあたりに渦巻いている人の流れを眺めていると、彼女は、急に肩のあたりがうそ寒くなるのを覚えた。

まるで影絵でもみているように、遠く離れた気持ちだった。

周囲の物音は何も耳にはいらなくて、さらさらと自分の心に砂をこぼしているような空虚が感じられた。

それは何か凶^{わる}い予兆のようであった。

「あと八分しかない」

またあわただしい夫の声が肩のあたりに戻ってきた。

奈美は、操^{あやつ}り人形のように歩いた。

できたばかりの新幹線歩廊へ出るには、なんども階段を上がらなくてはならない。

まだコンクリートが冷たく匂っているような廊下を抜けて、広い階段を上がって行くと、また風が舞いおりてきた。

小さく叫んで奈美は眼をとじた。

むっと生暖かい風が、脂^{あぶら}じみた掌のように、自分の鼻孔をふさいで吹きすぎていった。

「ひどい風……」

唇を動かすのさえ億劫^{おっくう}だった。

「六号車だったね」

夫は、奈美のことを忘れて眼を走らせていた。

「ねえ、待って……」

眼の中にほこりがはいったようで、瞼^{まぶた}があげられなかった。

けれど、手探りしたあたりに、夫はもういなかった。

どこへ行ってしまったのか。

彼女は心細さに立ちすくんだ。

眼頭を指先でおさえながら、そっと瞼を薄めにあけると、いきなり象牙色に磨き立てられた車体の一部が眼にはいった。

雑誌やテレビでなんども馴染^{なじ}んではいたが、実物を見るのは、これがはじめてのことだった。

丸くとがった頭部^{ゴジネット}と、全体に丸味を帯びたその新幹線ひかり号の車体をみていると、巨大な芋虫^{いもむし}がうずくまっているように思えてしかたがない。

どこかで似たようなものを見た記憶があると思ったら、それは空想映画に出てきたモスラという怪物の姿だったのだ。

だが、その連想は、いくらか彼女の緊張をときほぐしてくれた。

「奈美、こっちだよ」

夫が小走りにやってきた。

「ビュッフェの次の車なんだ」

彼らは、ツートンカラー、流線型の車体に沿って歩いた。

「こうしていると、これから二人で旅行にでかけるところみたいだわ」

電気時計の針がぷりっとふるえて、三時二分前を示していた。

けれど、夫は答えないで、煙草をくわえた。

「晩ご飯は大阪なのね」

夫が出張すると、ご飯ごしらえがとたんに億劫になっ
てしまうのだ。

今夜は、実家へ帰って泊まってこようかしらと考
えた。

「今夜は、部長といっしょに晩飯を食うことになって
るんだ。どうしても会って報告しなきゃならないことが
きたからね」

「部長って、千代川さんも出張なの」

「バカだな。榊原さかきばらさんのことじゃないか」

榊原というのは、もとの会社の部長のことなのだ。

そうか、この人は出向社員なのだ。いまの会社は出向
先だから、いわば大阪の近畿電力が、この人にとっては
実家なのだと彼女は思い起こした。

「じゃ、ひょっとしたら、大阪へ戻るなんてことになる
かもしれないわね」

東京で生まれて育った奈美は、大阪転勤を恐れてい
た。

「なるもんか。当分はね」

「当分なの」

「しかし、ひょっとすれば、またもとの化学屋バケガクに、戻る
かもしれん」

「戻るって、なにになの」

けれど、また風が舞って、夫は、乗車口に急いだ。

「明後日帰る。会社には内緒だからね。風邪だってこと
にしといてくれ」

耳もとに言い残して、夫は、乗車口にとび込んでいっ
た。

どうして内緒なのかしら。出張のはずじゃなかったの。

彼女は眉根をよせて、考え込んだ。

考えながら、列車の中の夫の動きにつれて歩いた。

六号車十一番の窓ぎわの席だった。三人がけのほうではなくて、二人がけだった。

中腰になったまま、夫は小さく手をふっていた。

はにかんだようないつもの表情なのだ。

彼女も片手で袖口をおさえながら手をふった。

ゆっくりひかり号は発車した。

六号車の後ろは一等車になっていて、そこらはずいぶんゆったりしていた。

人影もすくなく、奈美の目の前に、サングラスをかけた男の顔が近よってきた。

削ぎ取ったようにやせた頬をしていた。小さな体格だが、全身に鋭さのみなぎった威圧感があふれていた。

その隣席に明かるい色どりのスーツを着た若い女が腰かけていて、二人は、何かささやきかわした。

夫婦かと思ったが、そうでもないようだ。彫りの深い顔だちの女は、男よりもはるかに体格がよかった。

ずっと、女が立ち上がって六号車のほうへ歩きだした。

手に、小さなスーツケースをさげている。

なんとなく気になって、奈美も小走りに走った。

まだ動き出したばかりなので、すぐ六号車に追いついた。たったいま、手をふり合って別れたばかりの夫を、ふたたび六号車の席に見つけ出したとき、彼女は、奇妙な感じを受けた。

まるでタイム・マシンによって、自分が過去へとさかのぼっているような錯覚にとらえられたのだ。

夫は、取り澄ました横顔をみせていた。

ついさきほど自分に向かって手をふっていた夫とは、まるで別人のようにみえた。

その夫の隣りの席へ、スーツケースをさげた女が近よってくる、ろくに座席番号をたしかめもしないで、すっと腰かけた。

いかにも、この席だというような態度だった。

知らない人なら、てっきり夫の同伴者だと思い込んだにちがいない態度である。

奈美は、いきなり頬を打たれたような衝撃を受けて立

ちすくんだ。

超特急ひかり号は、にわかに速度を増し、流れるような速さで東京駅をすべり出して行った。

3

名古屋に着いたのは、予定より四分遅れて、午後五時三十一分であった。

気密された二重窓になっているので、ホームの物音はすこしも聞こえない。

乗降客はあまりなく、三分の停車時間がすこし長く感じられた。

飯塚敏夫は、組んだ膝ひざの上に広げていた週刊誌を、また取り上げた。

「大阪は雨かしら」

隣席から、からだを乗り出すようにして、晴子はるこは、窓の外をのぞいた。

そうすると、いやでも飯塚の肩に、彼女の胸がよりかかり、髪の毛の香が、甘酸っぱく鼻孔をふさいだ。

「大丈夫でしょう。天気は西から移動するといえますから」

堅苦しい口調で、彼は答えた。

「だといいんだけど、はじめての街で、いきなり降られたんじゃ、心細くなっちゃうでしょ」

彼には、この同伴者がいささか重荷でならなかった。もしこんなところを知人に見られたなら弁解のしようがない。

そう考えて、いっそ自戒していた。

けれど、旅の気やすさからだろうか、相手は、かなり大胆に思えるほど、なれなれしくふるまった。

「お食べにならない」

チョコレートチョコレートを、半分に折ってさし出すのだ。

ファッション・モデルだということだが、どうしてこんな女性を、あの寺尾が知っているのだろう。

たった一度紹介されて、三人いっしょに会食したことがあるというだけなのに、こんなに親しげな態度を示されるとは思いがけなかった。

「でも、さすがに速いわね。三時に東京を出て、もう名古屋なんですもの」

いつ動いたのかわからないうちに、窓の外の風景は変わっていた。